

イネ

1 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや少ない
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、ヒメトビウンカの虫数は平年比少なく(－)、確認ほ場率は平年比やや低い(－)。

項目	本年	平年値
虫数(匹)	0.1	0.9
確認ほ場率(%)	12.5	34.0

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

(2) 昨年は、縞葉枯病の発生は認めていない(平年並)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生を認めていない。

2 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 前年の新成虫の予察灯での誘殺数は平年比やや多い～多い(+)。

地域	7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(匹)	
	26年	平年値
京田辺市	78	50.0
亀岡市	377	103.7
京丹後市	98	56.9

(2) 向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p 10を参照**

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

（1）越冬罹病枝率は、平年比やや少ない（－）。

項目	本年	平年値
罹病枝率(%)	2.8	14.2

（2）向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）小袋掛け前に、病斑のある果実は摘果し防除を徹底し、速やかに小袋掛けを行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（1）前年10月は、発生を認めなかった（平年並）。

項目	平成26年10月	平年値
発病果率(%)	0.0	0.6

（2）向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）果実では、幼果の時に感染する。

（2）芽の基部に病斑が生じた短果枝は、切り取り処分する。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

（1）前年10月は、発生を認めなかった（平年並）。

項目	平成26年10月	平年値
発病果率(%)	0.0	0.9

（2）向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。

（2）新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた場合は、速やかに切り取り園外の土中に埋める等処分する。

（3）5～6月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

* 今後注意すべきその他の病虫害等は p 10 を参照

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平成並（前年比やや少ない）
 丹波 平成比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

(1) 前年10月の発生量は、山城で平成並、丹波で平成比やや多く（+）、丹後で発生を認めていない（例年並）。

地域	項目	平成26年10月	平成(例年)値
山城	綴葉数(m ² 当たり)	0.03	1.1
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	3.1	10.3
丹波	綴葉数(m ² 当たり)	1.2	0.7
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	50.0	15.0
丹後	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 4月中旬現在、発生は認めていない（平成（例年）並）。

地域	項目	本年	平成(例年)値
山城	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.4
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	0.0	5.1
丹波	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.4
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	8.3
丹後	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(3) 4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平成並、綾部で例年並。

地域	項目	本年	平成(例年)値
宇治	誘殺数	3.0	40.4
綾部		1.0	4.9
丹後		0.0	-

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平成比やや多い（前年並）
 丹波 平成比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 例年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 前年10月の発生量は、山城、丹波は平年並、丹後は例年並。

地域	項目	平成26年10月	平年(例年)値
山城	寄生芽率(%)	12.5	11.8
	巻葉数(m ² 当たり)	5.4	11.3
	発生ほ場率(%)	72.7	51.9
丹波	寄生芽率(%)	19.3	20.9
	巻葉数(m ² 当たり)	2.8	3.3
	発生ほ場率(%)	66.7	40.0
丹後	寄生芽率(%)	0.0	7.6
	巻葉数(m ² 当たり)	11.3	2.9
	発生ほ場率(%)	75.0	32.1

(2) 4月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で発生を認めず(平年並)、丹後で例年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年(例年)値
山城	寄生芽率(%)	0.8	1.4
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	19.0	7.8
丹波	寄生芽率(%)	0.0	0.7
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	5.0
丹後	寄生芽率(%)	10.0	7.6
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	2.9
	発生ほ場率(%)	25.0	6.3

(3) 4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比やや多く(+)、綾部で例年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年(例年)値
宇治		505.8	630.5
綾部	誘殺数	1356.2	701.9
丹後		202.3	-

(4) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬後新芽に産卵する。気温が高いと発生が早くなる。
- (2) ふ化した幼虫は新葉裏面の表皮下に食入し、成長すると葉を三角形に巻く。
- (3) 秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- (4) 巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。なお、摘採が遅くなる園では、幼虫の発生に十分注意する。

3 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並 (前年並)
丹波 平年並 (前年比やや少ない)
丹後 例年並 (前年比少ない)

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年並、丹後で発生を認めず(例年並)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	0.9	1.8
	寄生虫数(100葉当たり)	7.8	14.0
	発生ほ場率(%)	14.3	29.6
丹波	寄生葉率(%)	0.7	1.8
	寄生虫数(100葉当たり)	2.3	5.0
	発生ほ場率(%)	33.3	28.3
丹後	寄生葉率(%)	0.0	0.4
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	3.3
	発生ほ場率(%)	0.0	6.3

(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が上昇し、暖かく晴れた日が続くと、急速に増殖する。
(2) 一番茶芽が霜害を受けると、残った健全芽が集中的に加害を受け、著しい被害となるので、防除を徹底する。

4 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや多い（前年比多い）
丹後 例年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 前年10月の発生量は、山城、丹波で平年並、丹後で例年並。

地域	項目	平成26年10月	平年(例年)値
山城	寄生株率(%)	15.5	21.0
	発生ほ場率(%)	50.0	64.4
丹波	寄生株率(%)	28.3	21.7
	発生ほ場率(%)	83.3	65.0
丹後	寄生株率(%)	5.0	9.1
	発生ほ場率(%)	50.0	42.9

(2) 4月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや多く(+)、丹後で例年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年(例年)値
山城	寄生株率(%)	25.2	18.0
	発生ほ場率(%)	61.9	54.4
丹波	寄生株率(%)	13.3	8.3
	発生ほ場率(%)	66.7	46.7
丹後	寄生株率(%)	27.5	12.8
	発生ほ場率(%)	75.0	37.5

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。ふ化直後の1齢幼虫は、ロウ物質で覆われておらず、移動することができる。また、5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この時期のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。
(2) 発生は園により差があるので、毎年発生し前年に適期防除できなかった園では注意する。なお、標高の高いところでは、ふ化が10日程度遅れる。
(3) 多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。

(4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

野菜

1 野菜類 アブラムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 4月上旬現在、トマト（施設）で発生を認めていない（平年並）。一方、4月中旬現在、キャベツでの発生は平年並、ネギで平年比多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
トマト(施設)	寄生葉率(%)	0.0	0.3
	発生ほ場率(%)	0.0	8.3
キャベツ	寄生株率(%)	6.0	15.4
	発生ほ場率(%)	75.0	72.0
ネギ	寄生株率(%)	7.2	1.5
	発生ほ場率(%)	60.0	23.8

(2) 4月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年並。

(3) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く（-）、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、無翅虫が集団で作物を加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。

(2) は種または定植する際には、シルバーマルチやシルバーテープ等により有翅虫の飛来を防止する。

(3) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。

2 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.3
発病ほ場率(%)	0.0	5.0

(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。

(2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壤中で2～3年間生存可能である。

3 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比やや少ない（-）。

項目	本年	平年値
幼虫・蛹数(/10株)	0.0	0.1
寄生株率(%)	0.0	0.9

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は亀岡で平年並、丹後で平年比少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
 (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。

4 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.6
発病ほ場率(%)	0.0	5.4

- (2) 前年秋期は、発生を認めていない(平年並)。
 (3) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
 (2) 春に比較的低温で、降雨が多いと多発する傾向がある。

5 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	0.8	5.0
被害度	0.2	1.3

*被害度：被害の程度を0～100の指数で示す。

- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬し、成虫は4月中旬頃から発生する。年間5～6世代繰り返す。
 (2) 比較的砂地の土壌で発生が多く、5～6月に少雨の年に多発する。
 (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

6 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

項目	本年	平年値
被害株率(%)	36.0	11.3
被害度	9.6	3.1

*被害度：被害の程度を0～100の指数で示す。

- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。
- (4) 本虫は昨年6月以降、府内で発生を確認しているネギえそ条斑病を媒介する。
- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus: IYSV)による病害で、本病の防除には、ネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温、多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。
- (3) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部でストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌が発生した。耐性菌の発生地域では、いもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ（アドレス <http://www.pref.kyoto.jp/byogai/index.html>）を参照のこと。

4 種子の温湯消毒について

- (1) 温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

1 赤かび病

- (1) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよそ1週間後である。1回目の防除適期は二条大麦が穂揃期から10日後頃、小麦が出穂後7～10日の開花期、2回目はそれぞれ1回目防除の7日後が目安となる。
- (2) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にほ場の排水を良くする。
- (3) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

果樹

1 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) 開花終了後に花がらを落とす。
- (3) ハウス栽培では換気に努める等、予防を徹底する。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (4月18日から5月17日までの天候見通し)

平成27年4月16日
大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目の平年並の確率は50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	50	30
降 水 量 (日本海側)	30	40	30
〃 (太平洋側)	20	40	40
日 照 時 間	30	40	30

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い、日照時間は平年並と予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 --- 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 --- 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
 (2) 4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- (3) 4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
 (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
 (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(A DI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

1 使用方法が変更された農薬

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 使用回数変更 希釈倍率変更
ジメトエート (平成27年2月4日)	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤、ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネット (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW、マブリックジェット	適用作物削除 適用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85、デナポン水和剤50	適用作物削除

(平成27年3月23日現在)

2 今後使用方法が変更される予定の農薬

有効成分 (変更予定年月日)	主な商品名	変更内容※
カルボスルファン ベンフラカルブ	ガゼット粒剤、アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤 オンコル粒剤、オンコル粒剤5、オンコル粒剤1 ジャッジ箱粒剤、オンコルスタークル粒剤 オンコルマイクロカプセル、オンダイアエース粒剤 ホームガーデン粒剤、ガーデンホスピタル粒剤	適用作物削除
シロハトリン	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、ビリーブ水和剤	適用作物削除

(平成27年3月23日現在)

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます(要登録)。また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－